

特集

剣禅一味

剣道範士 小川忠太郎先生と宏道会

宏道会五十周年記念式総裁挨拶...	丸川	春潭
小川忠太郎先生 最後の訓話.....	小川	刀耕
剣道範士小川忠太郎先生 道人の生涯 (一)		
.....	長野	善光
宏道会の剣道	佐瀬	霞山
剣士の本懐	栗山	令道
剣、禅の道を生きて(一)	武藤	仁剣
驚きに満ちた場所	松本	佳代子

人間禅教団附属宏道会の最高師範であった剣道範士小川忠太郎先生は、小野派一刀流の免許皆伝者であり、禅の蘊奥うんのうを究められた偉大な禅者でありました。まさに現代の山岡鉄舟居士であります。先生は、真剣勝負の中で工夫され練磨された古流の剣道の形とその精神を、心血をそそいでご指導くださいました。剣道も禅も、人間形成のために命がけの修行、己おのれを捨てる修行を行うとゆえんいう点では、全く同じであります。「剣禅一味」といわれる所以であります。小川先生の剣道 宏道会の剣道 人間形成の剣道が、本年から全国に展開されるにあたり、特集といたします。

宏道会五十周年記念式 総裁挨拶

丸川 春潭

本日は秋深まる好天に恵まれ、遠くは山形、愛知、三重など全国から剣道界の諸先生、諸先輩のご来駕を賜り、宏道会関係者が相集い、新装なった道場において宏道会創立50周年を挙行できますことは、ご同慶でありかつ誠に法喜善悦でございます。

一言ご挨拶させていただきます。

皆さんご存じのように、宏道会は、人間禅教団傘下の会であり、人間禅教団第一世総裁耕雲庵立田英山老師の命名された宏道会であり、二世総裁妙峰庵佐瀬孤唱老師が発起してつくられたものであります。そして耕雲庵門下として29歳で入門し、的相承の禅の淵源を極められた、無得庵小川刀耕老居士を最高師範として頂いた剣禅一味の会であります。

この宏道会を、私は人間禅教団にとって極めて重要な柱の一つであると考えております。そしてまた、この宏道会は私の誇りとするものであります。その誇りとする根拠は、この宏道会の剣道が「無得庵小川刀耕老居士の剣道」であるということと、剣禅一味の道を極められた無得庵老居士という人物の素晴らしさにあるのであります。

ただ残念なことに、無得庵小川刀耕老居士から妙峰庵佐瀬孤唱老師、宝鏡庵長野善光老師へと伝えられた無得庵老居士の剣道、宏道会の剣道は、妙峰庵老師の早いご逝去に加え、宝鏡庵老師が昨年(平成16年)急逝されたために、今危機に立っていると考えております。

人間禅教団の伝法は、古来より言われております「見、師に等しき時はその半徳を減ず、師に勝りて初めて伝授するに堪えたり」の見所に従って、嗣法され伝承されているのであります。そして、もし「伝授するに堪える」人物が出なかったら、教団をぶつつぶせと言われておるのであります。

この見所で言えば、もし無得庵小川刀耕老居士の剣道を生きて伝える人物がいなくなったら、宏道会の存続はあり得ないのであります。そして考えますのに、宝鏡庵老師は少なく見ても10年は早く逝かれたわけでありますから10年の猶予は致し方ないとして、10年の後には、名実共に無得庵老居士の境涯の剣道を生きて伝える体制を宏道会に確立しなければなりません。後ろに老居士の揮毫された「一髪引千鈞」の偈額が、宏道会の行く末を見守っております。

宏道会の名誉会長であります小生もその責務を正受したいと思いますが、宏道会の古参の方々は、名と実が伴った無得庵剣道の確立を期して、これからの10年間、即ち創立60周年を目指して真剣に研鑽を積んでいただきたいと思えます。そしてこの伝承についての小生の考え方は、一個半個が出ればいいというものではなく、群としてそれを目指し、群として達成されるべきものであると考えております。

ご来賓、諸先生、諸先輩は、例外なく小川忠太郎先生を直接間接にご存じと拝察いたしますが、お察しの通り現会長以下宏道会の会員は「小川忠太郎先生の剣道」としては、まだ未達、未熟であります。どうぞ、今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

私の今縷々申し上げました10年後の宏道会の目標達成は安易ではありませんが、不可能なことではないと確信しております。それは、現在の宏道会の面々はまだ未達、未熟ではありますが、それぞれ素晴らしい素質と、熱い誠をしっかりと懐いておるからであります。

諸先生方におかれましては、ぜひご鞭撻を頂きながら10年後をしっかりと見届けていただきたいと思えます。

以上で私のご挨拶とさせていただきます。

合掌

(平成18年11月5日、人間禅本部道場において)

著者プロフィール

丸川春潭(24ページ参照)



宏道会新剣道場の外観



新道場での稽古

小川忠太郎先生 最後の訓話

小川 刀耕

まず、小学生や年の若い人達に一言申し上げる。宏道会では、背筋を伸ばして数息観をしている。あれをしっかりとやる。毎日忘れないでしっかりとやる。一生涯やる。最後の息を引き取る時までやる。このことをひとつしておく。

次に青年の人、つまり指導する側の人にしておく。誰かと稽古をする時には、ひとつの区切りを付けて（しっかりと目標を定めて）する。そうでないと、いろいろな技がこんがらがって、何をやっているのか分からなくなってしまう。その区切りをどう付けるかについては、今まで言わなかったから、今日はそのことを話しておく。

宏道会の剣道はスポーツじゃない。剣道という道。その道に入る方法はたったひとつだけれども、それには段階というものがある。

第一段階では、その目標をどこに付けるかと言うと、具体的に言えば、「白井亨（の剣道）」に付ける。白井亨は2ヵ月間の自己流の坐禅の修行で「道」の第一関門を突破している。

『五葉』だか『人間禅』に勝海舟のことが書いてある。勝海舟と白井亨が稽古している。しかし、稽古にならない。海舟は、すくんでしまって、どう



最後の訓話（平成3年9月）

することもできない。あんまり不思議だから海舟が白井亨に「どういう訳ですか？」と聞いた。「勝さん、それはあなたが少しばかり剣術をやるからだ。全然やらない人なら何でもないよ」と白井亨が答えたそう。それで勝海舟は、またびっくりした。

白井亨は、自分の剣道は「本来の面目」だと言っている。「後の剣客等のごときは知るあたわざるところなり」とその著書『剣道みちしるべ』に書いている。そのことを私が人間禅教団第一世総裁の耕雲庵老大師に話したら、「そのように話さないで、自分は坐禅で体得したんだから、剣道をする者は坐禅をやんなさいと言ってあげたほうがいい」と言われた。それは、そのとおりですね。

防具を付けて稽古すれば、当時名人といわれた白井亨の所へ到達することを目標に稽古する。第一段階にも行っていない、でもそこに着眼する。どこで稽古しても、それに目を付けて、みんなのお手本になるような稽古をする。容易なもんじゃないですよ。

白井亨がそこまで行ったのには、ひとつの秘訣がある。師匠の言うとおりに、水を被ったり、精進料理を食べたりして、本当に死んでしまう所までいった。それが白井亨を一変させた秘訣です。「本当に死んでしまう」という所までやる人は、専門家でもほとんどいない。宏道会の先輩の立場の人達は、白井のそういう所に目を付けて稽古する。そうでないと、宏道会は馬鹿にされる。「なんだ、あの稽古は」と物笑いになる。

剣道でできないことは、日常生活でできるはずはないんだ。そこをよく考えて、まず剣道の上に現す。それをひとつっておきます。

しかし、白井亨の境涯きょうがいは「第一歩」の所。教団の分け方で言うと、「見性人理」の所。師匠の寺田五郎右衛門は、東嶺和尚について「見性悟道」の所まで行っている。つまり、もうひとつ上。白井が師匠に会うと、体がすくんでどうすることもできない。それだけの差がある。山岡鉄舟先生も「見性悟道」と言っています。つまり、修行には段階

というものがあるということです。「見性人理」の上が「見性悟道」。

山岡鉄舟先生の弟子に松崎浪四郎という先生がいる。これは、無刀流の石川龍三^{りゅうぞう}という先生から聞いた話だが、松崎先生が「山岡鉄舟という人は、徳川300年であれだけの人はいない。けれども間合を知らないようだ」と言っていたそうだ。それがどういう意味か石川先生には分からない。ここまで来ると、見性悟道のもっと上、「悟了同^{こりょうどう}未悟^{みご}」。

人間禅教団では、以上の三つの段階に分けている。3段階に分けてこのように話すと大変に思えるが、簡単に言えば宏道会の会歌にある「至誠の人にならんかな」。誠を尊んで「至誠」と言う。誰でも持っているんです。あたりまえの人間です。これが「悟了同未悟」。だんだんそこへ行く。順序があることを知っておく。そういう高い所は理想において、まず白井亨の境涯を目標にして稽古する。そして、その次の見性悟道へも必ず行ける。

今日一番話したいのは、まず白井亨の所まで、まず行くこと。大変



宏道会剣道場にて

ですがね。そこへ行く秘訣は、そういう志を立てること。どうか、宏道会の将来のために、まず白井亨を目標にして、しっかりやってもらいたい。「見性人理」を目標に稽古することを話すために今日は出てまいったわけですから、どうぞしっかりやってください。私の方からどうやれと言ってできるものではないですから。みんな各自に、どうかしっかり修行してもらいたい。以上白井亨のお話しをしました、ね……。

皆さん、これが私の最後の話になると思います。

一言申し上げて挨拶に代えさせていただきます。

合掌

(平成3年9月29日、宏道会創立三十五周年記念式の挨拶より)

著者プロフィール



小川刀耕（本名 / 忠太郎）

明治34年、埼玉県熊谷市生まれ。剣道範士九段。警視庁剣道名誉師範。全日本剣道連盟相談役。小野派一刀流免許皆伝。昭和9年、両忘協会釈宗活老師に入門。昭和23年より釈宗活老師はっすの法嗣うんのう耕雲庵立田英山老師（人間禅教団創立者）に参禅。禅うんのうの蘊奥を究め、無得庵の庵号を授与される。人間禅教団総務長、本部道場長を歴任。昭和31年、同教団附属宏道会の創立以来、最高師範として小野派一刀流・無刀流・直心影流を指導。平成4年1月29日帰寂。享年91歳。

剣道範士小川忠太郎先生 道人の生涯 (一)

長野 善光

一 はじめに

私の最も尊敬する剣禅両道の師匠でありました小川忠太郎先生（無得庵刀耕老居士）が帰寂されて10年が経過しました。日がたつにつれて先生から頂いた御教訓が、より鮮明に思い出される昨今であります。先生のような稀に見る高潔なお人柄について、一人でも多くの方々にお伝えしたいと思います。非力不徳のためとてもそれを尽くすことは不可能であります。せめて私の心に残る先生のお言葉や御事跡の中から、幾つかを拾って先生をお偲びしたいと思います。

二 少年時代

先生は、明治34年1月10日埼玉県熊谷市にお生まれになった。農家の一人息子であった。子供の頃、生家の裏にあったお稲荷さんの境内の木によじ登ってよく遊んでおられた。それをお母上が御覧になって危ないから降りるように声をかけられると、ますます上の方に登られる。そこでお母上は「忠太郎や、飴をあげるから降りておいで」と声をかけられるのが常であったという。八王子修禅会円了の帰途、宏道会（人間禅道場附属の剣道の会）有志と共に焼香にお伺いした時、霊前にお供えしてあった古木について、御令室様から「これは主人が幼

い頃木登りしていた木の枝で、先日熊谷へ行った時に持ち帰りました」とのお話があった。朽ちかけた老木一片、それは、先生が熊谷へ行かれる度に自ら手で撫でておられた木であった。それを大切に東京へ持ち帰られ、仏前に供えられた御家族の暖かいお心遣いに打たれるものがあった。

こうして成長された先生は、12歳の時初めて木剣を握られた。その頃は現代と異なり、大人でもごく少数の者しか剣道の稽古をしていなかった。そのことを思うと、子供心にも何か剣道に引かれるものがあったものと思われる。この時の剣の師は直心影流の剣士で七尾菊太郎といい、道場の名は尚道館といった。

両親の意向に沿って熊谷農学校に進まれた先生は、そこでも剣道を熱心に続けられた。指導したのは吉岡道德という先生で、その内容は只一心に面を打つことだけであった。先生は御自身で言われているように、生れつき深くものを考える御性格であった。こういう人には、多彩な技よりも面一本を一生懸命に打つことの方が向いていたのであり、同時にそれが心の修練には最善の方法であった。

後に剣道家になられてからも、一貫して正面打に徹せられ、剣道の世界では、「小川先生の面」として有名であった。先生曰く「正面打は一番簡単で易いようであるが、実は一番むづかしい技である。それは剣道でやかましく言われる気・剣・体の一致、即ち三昧になって初めてできるものである」と。

この一番むづかしい正面打を生涯稽古の上で精進されると同時に、日常生活の上でも工夫してこられた。正しいほんとうの正面打は、先生の生涯を一貫する姿勢であった。有名な剣道家である高野弘正氏曰く「小川先生は面一本で剣道を完成された」と。

農学校を卒業されると、外部から学校に剣道の指導に来ていた武政という先生に認められ、東京へ出て本格的な剣の修行に励まれることになった。そして郷里の大先輩で、一世を風靡していた一刀流の高野

佐三郎先生の修道学院に入るべく、青雲の志を抱いて上京された。

こうして大正8年18歳の時、高野先生の長男泰正氏が経営に当たっていた修道学院の門を叩かれた。高野泰正氏は面接の際、入門の動機を先生に聞いたところ「個人の完成のため」と答えられ、氏を驚かせたという。その頃の剣道修行の目的は、現代でもほとんどの人がそうであるように、剣道に強くなることであり、昇段することであった。剣道の大家と ^{いえど} 雖も、剣道によって心を錬磨するというような発想は、一般にはなかったのである。

このように、先生の剣道修行の心構えは、最初から人間形成にあった。ただ、それを叶える剣の師に巡り会うことが困難であった。

三 青年時代

修道学院に入門してからの稽古は、文字通り命懸けであった。その時分、修道学院では、高野佐三郎先生の代理として、門下生が陸軍幼年学校へ剣道の指導に行っていた。先生はまだ無段であったが、誘われるまま参加した。相手は22歳から28歳位までの血気盛んな有段者で、平素は幼年学校の生徒に剣道を指導している助教（下士官）連中である。

この人達に対し、元に立って2時間の連続稽古をするのである。元に立つとは、普通力量の上の者が下の者を指導することである。従って先生の場合は逆になるのであるが、それは修道学院の看板がそうさせるのであるから、死んでも元に立ち切らねばならない。しかも当時の稽古は荒っぽく、体当り・足^{がら}揃み組打ち等とても今日の比ではなかった。

この稽古で先生は、助教連の攻撃目標となり、徹底的にいじめられた。後日、先生は当時を回想して「この稽古の度に今度こそ殺されると思った」と話されたことがある。また亡くなられる前にお伺いした時に、どこがお悪いのかお尋ねすると、先生が「身体全体が悪い。そ

の原因は分っている。若い時に無茶な稽古をした。その折の全身打撲である」と言われたのをみても、想像を絶するものであったと思われる。

その時期の先生は、晩年お見受けしたような骨格のがっしりした方ではなく、むしろすらっとした色白の優^{やさおとこ}男で、剣道などという無骨なものとは縁遠い風情であったといわれる。

3年間の修行の後、20歳で兵役に服するため修道学院を出られたが、この間の稽古といえは、ただひたすらに面を打つだけであった。それでも三段の力を備えるに至っていた。

1年間の軍隊生活の中でも、道を求める心が強く、人生に対する疑いは、次第に増大していった。そしてある時フツと剣道には何かがある、剣道の修行に打ち込んで究極に至れば、人生に対する煩悶から脱却できるのではないかと思われるようになった。

大正11年末に兵役を終え上京した先生は、神田神保町に下宿して、修道学院・有信館（中山博道主宰）・旧制第一高等学校・陸軍士官学校・陸軍戸山学校等を巡回されて一日に4・5回稽古された。しかし、心の修行を指導してくれる師に巡り会うことができなかつた。こうした中で、警視庁や国士館で剣道師範をされていた斉村五郎先生に私淑^{ししゆく}するようになり、今後の修行の進め方等について相談に伺われたところ、国士館専門学校に入ることを勧められ、大正12年春国士館高等部へ入学された。

ここでは、難行苦行に徹することによって精神的解脱が得られるのではないかと、1週間断食しながら稽古する等されたが、結局得られるところはなかつた。

その頃、斉村先生の紹介により、当時著名な漢学者（陽明学）森茂（号蒼浪）先生に面会される。先生23歳の時である。これは斉村先生が、剣道によって生死の問題を解決しようとして日夜苦しんでいる先生を、気の毒に思われて取られた処置であった。これが先生の人生に

大きな転機を与えることとなる。

森先生に紹介されて間もなく、国土館の夏休みに郷里の熊谷に帰省され、相変わらず「人生とは何か」の疑問を抱きつつ熊谷土手を歩かれていた時、突然ある感動が全身を貫き、1尺も地上に飛上られた。そして気がつかれると「俺は生きている、俺は生きている」と口走っておられたという。心の底からの高ぶりと全身の軽快を覚えられた先生は、早速上京して森先生を訪ねられた。森先生は顔を見るなり「小川さん、貴方は何か得ましたね」と言われ、これを機会に毎週2回陽明学の講義をして下さることになった。このことは先生の間人形成に大きな影響を及ぼすことになる。この講義は27歳まで4年間続いた。

後年、先生はこう語られている。「森先生から最初に『愚夫愚婦』の話聞いて感激した。人間は世間的に立身出世するのではなく、道を行ずることが大切であることを教えられ、おかげで道の修行に入ることができた」と。

「愚夫愚婦」とは【愚夫愚婦とその徳を同じうする、これを同徳という。愚夫愚婦とその徳を異にする、これを異端という】という一節の中にある言葉で、この一節は中国の古典『書経』の「五千之歌」から引かれたものである。

後に両忘協会（昭和15年3月に両忘禅協会と改称）に入門して、初めて禅門独得の提唱を拝聴された時「これは森先生の講義と同じだ」とびっくりされるのである。

四 禅道入門と中国出征

斉村先生は、18歳の時京都南禅寺に入り、半年間僧堂生活をしながら剣道修行をされた経験を持っておられ、この御体験が以後の人生に大いに役立ったという話を時折されていて、先生は何回もそれを聞かれていた。従って、先生は禅についての関心は持たれていたはずであったが、まだ縁が熟していなかった。

先生が両忘協会に入門されたのは、昭和5年29歳の時である。この禅会は、明治初年山岡鉄舟・高橋泥舟・鳥尾得庵・中江兆民等の諸居士が、当時の円覚寺管長今北洪川禅師を東京に拝請して摂心会を開催したのが、その起源である。会員は一般社会人が中心で、道場は東京の谷中にあった。

両忘協会は、高貴栄達を望まず、心的^{たくま}琢磨をもって第一義とし、終生養道に精進することを主眼としていたから、先生に全くふさわしいものであったと思われる。その時分、両忘協会では、今北洪川禅師の^{はっす}法嗣の釈宗演禅師のそのまた法嗣であられる両忘庵釈宗活老師が、師家として修行者の指導に当っておられたので、先生は両忘庵老師に入門されたわけである。

求道心が熱烈であったにもかかわらず、正師に巡り会うことができなかった先生は、遂に永年の念願であった心の師に会うことができたのである。何事にも純一無雑に、一筋に打ち込まれる先生のことであるから、いかなる困難も物ともせず、勇躍して禅の本格的修行に^{まいしん}邁進されたに違いない。

なおこの時期、30歳の時に郷里の大地主の次女田島茂子様と結婚されている。両忘庵老師の御引退後は、その法を嗣がれた耕雲庵立田英山老師について修行を継続された。後年耕雲庵老師は、戦後の社会情勢に適應する布教方針を立てられ、両忘禅協会を新たに人間形成を目的とした禅の専門道場として脱皮せしめられた。それが現在の人間禅教団であり、後日先生は教団の総務長・本部道場長等の大役を担われることになるのである。

昭和12年支那事変が^{ほっばつ}勃発すると、先生は応召され上海上陸作戦に参加。続いて中国大陸を各地に転戦された。この時の階級は陸軍伍長(下士官)。国土館の教え子はほとんど将校になっていたが、そのようなことには全く無頓着で、苦しい戦地の生活を送っておられた。それを見た教え子達は、陰に陽に先生のために尽されたという。

軍隊という処は、階級がすべてであったから、少しでも上の階級を望むのが常であった。そういう中であって、階級にこだわらない生き方をされたのは、剣道修行の目的を段位獲得とせず、心の修行におかれたのと全く軌を一にする。ある人がこれを評して「小川先生は僧侶になるのが一番適していたのではないか？」と。正に先生は世間の事に執着されない求道一筋のお方であった。

戦地において敵弾が雨霰^{あられ}と飛んで来て、手も足も出せない時は、壕の中でじっと坐禅を組んでおられた。戦地ならではの得ることのできない貴重な御体験は「命懸けの時に緊張したら駄目」ということで、そのような時こそ肩の力を抜かねばならないが、それを戦地で体得されたという。肩の力を抜くと不思議と直心影流法定之形と同じになって、腰から下に力が入り、余裕をもって事に対処することができた由である。

2年余の戦地の生活を終え、昭和14年陸軍軍曹に昇進されて帰国された先生は、国土館に戻られ、昭和16年国土館専門学校剣道主任教授に就任される。剣道の専門家になると、あちらこちらの学校その他を掛け持ちで指導するのが普通であるが、先生は国土館以外にはどこへも行かれず、国土館勤務に全力を尽くされた。

御令室様のお話によると、学生の就職の事で地方へ長期の出張をして帰京されてもまず学校へ直行し、仕事を終えた後帰宅されるのが常であった。また昭和20年3月の東京大空襲の時には、自宅の事は顧みず国土館の講堂の屋根に登られ、消火活動を行い講堂を火災から守られたという。

このようであったから、柴田館長はじめ職員並びに学生一同の信頼を一身に集められ、当時の教え子との心の交流は終生続けられ、切れることはなかった。先生の真心は、禅の修行によって益々練磨され、至る処にその光輝を放って多くの人々の心に光明と、正しく生きる勇気を植えたのである。

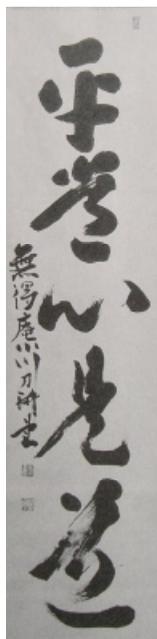
ちなみに先生は、両忘庵老師より、昭和7年に「刀耕」の道号を、そして同17年に黒絡子^{らくす}を授与されておられる。また耕雲庵老師からは、昭和27年に一等布教師に任命され、同31年には「無得庵」の庵号を授与されておられる。

五 戦後の窮乏時代

昭和20年8月15日、日本は国運を賭^とした戦争に敗れ連合国に降伏した。占領軍は剣道を国粹主義の源と見、かつ野蛮なものとしてこれを禁止した。このため、剣道家はすべて職を失うことになった。こうして先生の御苦難の生活が始まる。当時は誰でもが衣食住の欠乏で苦労していたが、先生は天職を奪われ収入の道が鎖^{とざ}されたから尚更であった。時に先生44歳の働きざかりであり、子供は発育ざかりの男の子1人に女の子4人の7人家族。貧乏のどん底のきびしい御生活ぶりは、言語に絶するものがあった。それにもかかわらず先生は、摂心会ともなると、世田谷から市川まで出てこられ、一日も欠かさず詰めておられた。これは文字通り不惜身命財の実践であり、道をすべてに優先し、生活を後にする真の修行者の姿勢であった。

私は、そのお姿をこの目で如実に拝見している。それは昭和25年頃のことである。市川の本部道場で開催される摂心会に参加すべく道場に向かっていると、私の前を歩く青年がいた。服装は大変粗末で背中リュックもボロボロであったが、その堂々たる姿勢といい、生き活きとした歩き方、特に足さばきのしっかりとして隙のないのを見て、日本にはまだこのような素晴らしい青年がいることは誠に頼もしいと、感心しながら付いて行くと、その青年は道場に入って行く。驚いて追いついて誰かと見ると、それが50歳の先生であった。

この時の先生の御勇姿は、今もアリアリと眼底に焼きついている。扶養家族を大勢抱えて、明日の食事にも事欠く状況の中で、大道を闊歩^{かっぽ}されるお姿は、正に真の道人と感じ入った次第であった。



平常心是道
無得庵小川刀耕書

先生曰く「どんなに窮した場合でも乱れない。これが剣道の最初の土台である」と。また曰く「道ということになると大事なのは、日常生活で修練すること。日常生活に役に立たない觀念の遊戯は道ではない」と。先生こそは正に修行即生活、生活即修行を实践されたお方であった。先生は、後年こう語られている。「禅をやっておくと人生の上において、いざという時に役立つ。自分は戦争に行った時と戦後貧乏した時に役立った」と。

(つづく)

著者プロフィール



長野善光（本名 / 拓郎）

昭和2年、愛媛県生まれ。中央大学卒業。元平田倉庫（株）専務取締役。昭和24年、人間禅立田英山老師に入門。人間禅師家。庵号/寶鏡庵。昭和26年、小川忠太郎先生に入門。宏道会離位。同会師範。小野派一刀流免許皆伝。平成17年帰寂。

宏道会の剣道

佐瀬 霞山

宏道会の剣道について、その歴史と稽古内容をご紹介しますと思います。

一 宏道会の歴史

昭和30年夏、佐瀬学先生（二世総裁妙峰庵佐瀬孤唱老師のご尊父・元千葉県警師範・剣道教士七段）が近所の子供達に剣道の手ほどきをされたのがその始まりです。

本部道場の近くの公園で夏休みに子供達を集めて始めました、最初は自分の孫3名と人間禅教団創立者の耕雲庵立田英山老師の孫3名の6名で始めました。その後2名増えて8名で稽古をしておりましたが、佐瀬学先生は体調不良となられ翌年3月に帰寂されました。その後ご子息の佐瀬一先生（後の妙峰庵老師）がご尊父の意思を引き継がれ、自ら指導にあたられました。

昭和31年8月、耕雲庵老師に『宏道会』と命名していただき、教団附属の剣道の会として正式に発足いたしました。

最高師範に小川忠太郎先生（無得庵小川刀耕老居士・警視庁剣道師範・剣道範士九段）、初代会長に佐瀬一先生がそれぞれ就任されました。聞き及ぶところでは、耕雲庵老師は小川先生に、宏道会には本当の剣道を伝えるようお願いされたそうです。小川先生はそれを実践するために、我々に命を投げ打って稽古をつけて

いただきました。

二 稽古内容

宏道会は、剣道と坐禅の修行によって本当の人、至誠の人になることを目的とする会であります。

宏道会の剣道は、古流の形（小野派一刀流・直心影流法定之形）を主としており、稽古は基本、切返し、掛り稽古を中心に、必ず先輩に掛かっていくことになっております。同年齢の者同士の稽古は禁止しております。小川先生にはずっと元に立っていただいて、稽古をしていただきました。今も忠実にそれを守っております。

また、小川先生は基本を大切にされて、入会して3年間は防具稽古をさせられませんでした。特に小学生には3年と言わずに、体がある程度出来るまでは防具稽古はさせず、ひたすら基本と切返しのための稽古をしております。

稽古の前には必ず坐禅（数息観）を30分行い、その後清掃をしてから稽古に入ります。稽古の前後には、『正しく・楽しく・仲良く』と『五戒』を全員で唱えることにしております。これも五十数年間続けてきております。

竹刀稽古も形の稽古も、真剣を持っているつもりで稽古をしており、一步踏み出せば自分の命はないとの教えを守り通しています。これは本当に難しいことですが、子供達にも竹刀と思わずに真剣と思って稽古をするように教えております。特に剣道では必ず相手が目の前にいますので、どうしても打ってやろう、打たれまいとの思いが出てきます、それを打ち破って相打ち合体での稽古ができればよいのですが、現実には本当に難しいことです。古流の形を本当に真剣に稽古をして自分のものにしないと、このよ

うな稽古はできません。

小川先生は我々会員にいつも、「本当の面一本が打てれば何時死んでもよい。私もこの面一本が打てないのだ」と言われておりましたが。その当時はその本当の意味がよく分りませんでした。最近少しこのことを言われていたのかなと思えるようになってきたようです。

「大宇宙の真っ只中で竹刀を大きく振りかぶった時は、宇宙全体を自分の腹の中に収めてずーっと足元に落とし、竹刀を振り下ろした時はまた元に戻すようにしなさい」とよく言われておりました。

我々はこの宏道会の剣道を後世に正しく伝えていく責任があります。本当に大変な責任であります。宏道会の級段位のうち妙位以上にある会員の責任は本当に重たいものがあります。本当の剣道は宏道会にしか残らないのではと思っております。小川先生の数々の教えをしっかりと守って修行に励んでまいりたいと思います。

宏道会の剣道が実社会において実践できているかを大いに反省するとともに、宏道会の会員として毎日の生活を今一度見直してまいりたいと思います。

著者プロフィール



佐瀬霞山（本名／長和）
昭和24年生まれ。（株）トリニティ勤務。宏道会第四代会長を経て、現在同会師範。同会離位。小野派一刀流免許皆伝。現在、人間禅特任布教師。庵号／千鈞庵。